

審査論文の要旨

本論文は、近世における相撲について藩・地域・国家の三つの視角からその具体像を分析し、相撲が廃止されることなく継続し社会に深く浸透していく過程、さらには相撲取の存在形態・社会的位置づけの解明を目指したものである。

本研究での第一の特徴は、相撲興行について、先行研究では「困窮」対策として実施されてきたと論じられてきたが、様々な複合的な要因が絡み合って実施されて、社会に広がっていったことを論じた。具体的には「人を集める」という目的のもと、商人による人的交流を目的としたものや民衆の欲求などによって計画され、一方で俵約令による制限を受けるなどその実態を詳細に明らかにした。

第二の特徴は、相撲取の存在形態・社会的位置づけを分析し、近世における実態を明らかにした。相撲取には藩に抱えられた者の中にも「士分」と「浪人」が存在し、その出自も百姓・町人であり、また支配という点でも藩による支配の側面と徳川政権の「家職」を介した支配の側面が混在していたことを明らかにした。相撲取が持つ多様な側面・性格に注目してその実態を具体的に明らかにした。

論文は、序章・本文第一部（第一・二・三章）・第二部（第四・五・六章）・第三部（第七章）・終章から構成される。

序章では、先行研究の整理を行い、特に芸能・興行史の観点、身分・社会集団論の観点から従来の研究の問題点を述べる。また藩・地域・国家という三つの視角を設定することで、徳川政権と藩領主という二つの支配の違い、あるいは藩や国家の視点からは把握しきれない地域の実態を明らかにするという本研究の課題を述べる。

第一部「抱相撲」の活動と実態」では、鳥取藩を対象に、藩と相撲取の関係を考察した。

第一章「抱相撲」の動向と藩との関係―鳥取藩を事例に―では、同藩に抱えられた相撲取一人に焦点を当て藩との関係について考察した。当初は江戸と大坂・鳥取を往復する状況であったのが、一定の時期を過ぎると、鳥取と大坂を中心に活動する状況になるという変化が見られ、藩との関係についても、藩主の嗜好といった一方的なものでは無く、藩からの資金の援助が見られ、また終生にわたって動向が把握されていた状況などから、藩との関係が一時的なものでは無かった事を明らかにした。

第二章「一九世紀における鳥取藩と相撲取の関係についての基礎的考察―抱えの目的と肩書を中心に―」では、従来は均質に語られてきた「抱相撲」内の差異を明らかにした。具体的には藩主の武芸に対する関心の高さが主たる理由として抱えることになったが、当時の江戸での相撲の隆盛などの複合的な要因であったこと、また同じ「抱相撲」であっても、士分であった「御角力」と、士分にならないと考えられる相撲取、あるいは家紋の入った化粧廻である「御印」を貰うだけの相撲取など、差異があった事を明らかにした。

第三章「近世後期の藩内における相撲取の処分―鳥取藩を事例に―」では、抱相撲及びそれに連なる弟子の相撲取が問題を起こした際の処罰について分析した。軽い処罰の「追込」では通常よりも早い日数で謹慎を解除されおり、処分よりも興行への参加を優先していた。一方で長期にわたる謹慎の場合、その解除は他の相撲頭取の要求が影響した。また弟子が問題を起こした場合、「抱相撲」がその対応に追われており、同藩の「抱相撲」には

相撲取全体に対する監督と共に、支配という側面があったことを論じた。

第Ⅱ部第二部「地域社会と相撲」では、地域における相撲を対象に、興行が行われる背景について考察した。

第四章「近世における神事相撲の変遷—松尾社「八朔相撲」を事例に一」では、松尾社で行われる「八朔相撲」について、中世以来の様式が継続していたものの、職業相撲が隆盛する元禄・享保期に相撲取を確保できなくなり、一時停止に追い込まれたことを明らかにした。19世紀には、氏子中が費用を捻出するようになり、氏子中が好む相撲取を呼ぶという状況に変化し、また幕末では「口論」が発生するなど問題が噴出したため、社家の間では廃止するべきという意見も出たが、氏子中の反発もあって、最終的には明治以降も継続したことを明らかにし、相撲を見る側の影響力について論じた。

第五章「領主財政と興行—出石藩の相撲を素材に一」では、出石藩の藩財政に関与した大坂銀主が藩内の相撲興行にも関与していることを明らかにした。同藩は財政状況の悪化が深刻で大坂銀主に融資を求め、財政状況の立て直しを図ったが、こうした状況下でも大坂銀主の要請から出石藩では定期的な上覧相撲が行われた。その目的は「相撲を見る」という事では無く、投機や商機の拡大といったものが背景にあったことを論じた。

第六章「地域における相撲興行の開催可否—摂州池田を事例に一」では、倭約令、天候や飢饉、相撲集団の問題行動によって相撲興行の開催が影響されたことを明らかにし、先行研究で明らかにされてきた「困窮」対策とは異なる側面における興行の開催可否の理由について論じた。また幕藩権力は人が集まるという状況を恐れ興行を制限する場合もあったこと、その開催可否は複合的な要因で決まるものであったことを論じた。

第三部「国家的動向と相撲」では、国家が相撲や相撲取を必要とする場面について考察した。

第七章「幕末維新期における相撲に対する意識と「廃止論」—違式誣違条例の再検討と合わせて一」では、徳川政権及び新政府による相撲に関する政策について明らかにした。ペリー来航時には徳川政権によって米国人の前で相撲が行われ、その後長州藩の内乱や、戊辰戦争において相撲取は軍事的な役割を与えられた。明治以降は相撲を廃止すべきとする主張があったが、政府は相撲を軍事面の精神的支柱の一つと位置付け廃止することではなく、招魂祭での実施など軍事的な側面を付与したことを論じた。

終章では、以上を総括し、相撲を介した、近世における国家・藩・地域の関係性について述べ、また特に興行論、身分論・社会集団論について本研究での成果を論じた。今後の課題として、藩に抱えられた相撲取の事例蓄積、地元に着する相撲取の分析についての必要性を挙げている。